

平和の思い、語り継ぐ

「水くれ」茶わんのかげらで

平和記念式典には兵庫県代表として神戸市原爆被害者の会副会長、高野光江さん(78)市灘区Ⅱが参列した。爆心地から約1・2kmの場所で被爆し、11歳だった兄は亡くなった。被爆地は今年、戦後71年で初めて現職米大統領の訪問を受けた。「お兄ちゃんも喜んでくれたよね」。慰霊碑に語り掛けた。

(杉山雅崇)

11歳の兄犠牲、神戸の高野さん

高野さんは当時7歳。現在の広島市西区に家族4人で暮らしていた。原爆投下の朝もいつも通り、自宅近くで友達と遊んでいた。突然、体が吹き飛ばされた。「水、ピカッ。何かが光った。別も分らない人々が集まっていた。」「水、

月後に亡くなるまで原爆症にさいなまれ、苦しみ続けた。子どもたちに自分の経験を伝え続けている高野さんにとって、今年5月の米大統領の歴史的訪問はうれしい出来事だった。「やっと来てくれた」。被爆者と抱き合う姿をテレビで食い入るように見た。「謝罪がなかったから残念という人もいます」。

安倍晋三首相は6日午前、広島市での平和記念式典後、被爆者団体の代表から要望を聞くため市内で面会した。各代表は、5月に広島を訪問したオバマ米大統領と安倍首相が核兵器のない世界の実現に言及したことを踏まえ、被爆国として核兵器禁止条約の早期実現のために行動することなどを求めた。

「体験を聞く責任」子ども代表

子ども代表

「私たちに、被爆者から託された声を伝える責任があるので。子ども代表の1人、広島市立竹屋小6年の中奥垂穂さん(11)は自分たちの世代が持つ大きな役割を感じながら平和記念式典で「平和への誓い」を読み上げた。

「世界がヒロシマを忘れたとき、再びあの日繰り返される」。その言葉が、中奥さん(左)と青木優太さん(右)の心に響いた。学校の平和学習で何人かの被爆体験を聞いてきた。顔をこわばらせ、思い出すのもつらそうにしながら語った人もいた。

「被爆者から生の声を聞くのは、言葉の重みが全然違う」と中奥さん。被爆者の平均年齢は80歳を超え、近い将来、直接体験談を聞く機会は失われる。次の世代はその言葉を聞けない。ならば自分たちが伝えなければ。被爆者と同じ時代を生きる最後の世代として責任が芽生えた。



平和記念式典に参列し、平和への思いを語る高野光江さん＝6日午前、広島市の平和記念公園

1年前、中奥さんは自宅近くで偶然、小さ



平和記念式典で「平和への誓い」を読み上げる青木優太さん(左)と中奥垂穂さん＝6日午前、広島市の平和記念公園